



ソーントン・ワイルダーの短編小説 「ザベットの結婚」 ——繰り返されるモチーフ「聖人」——

井 上 治

概要 ソーントン・ワイルダーが大学時代に書いた短編小説「ザベットの結婚」では、「聖人」がモチーフとして使用されている。大学時代に書かれたほかの短編小説や一幕劇でも用いられているこのモチーフは、彼の代表的な多幕劇『わが町』において観客に衝撃的な演劇的経験を与えることに成功する場面でも効果的に用いられているだけでなく、彼の後期的一幕劇においても使用されている。このように、彼が自分の思想と主題を伝えるために使い続けたモチーフ「聖人」が用いられているこの「ザベットの結婚」は、のちのワイルダーの作品につながる重要な作品であるといえる。

キーワード ソーントン・ワイルダー, 「ザベットの結婚」, 短編小説, 聖人
原稿受理日 2015年9月17日

Abstract In “The Marriage of Zabet,” a short story Thornton Wilder wrote in his college days, the word “saint” is used as the motif of the story. The motif “saint,” which recurs in other short stories and another one-act play written in the same days, is used afterward not only in his most famous full-length play *Our Town*, but also in one of his one-act plays written in his late years. Especially in *Our Town*, the motif plays an effective role in the scene where Wilder gave his audience a sensationally dramatic experience they had never been given before. “The Marriage of Zabet” is an important short story that is related to his later works because the motif “saint,” which Wilder used over and over again in his writing in order to convey his thoughts and themes, is used in this work.

Key words Thornton Wilder, “The Marriage of Zabet”, short story, saint

1. はじめに

ソーントン・ワイルダー (Thornton Wilder, 1897-1975) の生誕100年にあたる1997年から1998年にかけて、『ソーントン・ワイルダー—幕劇集 第一集』(*The Collected Short Plays of Thornton Wilder Volume I*) と『ソーントン・ワイルダー—幕劇集 第二集』(*The Collected Short Plays of Thornton Wilder Volume II*) が出版された。この出版によって、生前には彼の意思によって正式に出版されなかった、未発表であった、そして、生前に出版されていたが絶版などの理由で入手しづらかった彼の一幕劇を、誰もが容易に読むことができる環境が整った。そして、生誕100年を祝ってこれら的一幕劇のなかの数本が上演・朗読をされたこともあって、ワイルダーがピューリッツァー賞 (Pulitzer Prize) 受賞の二作品である『わが町』(*Our Town*, 1938) と『危機一髪』(*The Skin of Our Teeth*, 1942) という多幕劇だけの作家ではなく、多くのすぐれた一幕劇も書いていることが以前よりは広く知られるようになったといえる。

さらに、その10年後の2007年から2011年にかけて、ライブラリー・オブ・アメリカ (The Library of America) からワイルダーの戯曲・小説集が三冊刊行された。そのうちの二冊は小説集となっており、彼の中・長編小説の七作品すべてが収載されている。一般的にはワイルダーはピューリッツァー賞受賞の中編小説『サン・ルイス・レイ橋』(*The Bridge of San Luis Rey*, 1927) も書いた劇作家とみなされているが、この刊行によって、彼が『サン・ルイス・レイ橋』以外にも多くの小説を執筆している小説家でもあることが再認識されたといえる。

しかし、それよりも注目すべきことは、その二冊の小説集の一冊である『ソーントン・ワイルダー 「サン・ルイス・レイ橋」 その他の小説 1926年～1948年』(*Thornton Wilder: The Bridge of San Luis Rey and Other Novels 1926-1948*) のなかに、未発表の一篇を含む六篇の短編小説が収載されていることである。これらのうち五篇は、ワイルダーが大学生であった1917年から、彼が中編小説『カバラ』(*The Cabala*, 1926) で小説家としてデビューをする前の1924年までのものであり、残りの一篇は1938年に『わが町』で劇作家としてデビューする前の1936年に書かれたものである。ワイルダーの短編小説に関しては、筆者が知るところではこの六篇以外に雑誌に発表されたものは三篇あり、それらの二篇は1916年に、残りの一篇は1922年に発表されている。

ワイルダーは、『サン・ルイス・レイ橋』がピューリッツァー賞を受賞した年に彼の初の

劇集である『池を波立たせた天使』(*The Angel That Troubled the Waters and Other Plays*)を出版しているが、収載されている16篇の短編小説のなかの12篇は、彼の短編小説が集中して雑誌に掲載されていたのと同時期の1916年から1923年までに雑誌に発表された作品の再録なのである。いっぽう、短編小説に関しては、集中して雑誌に掲載された時期以外の唯一の発表作品である1936年の「軍艦」(“The Warship”)だけが、1961年に出版された『ピュリッツァー賞受賞者選集』(*Pulitzer Prize Reader*)に収載されており、そのほかの作品はライブラリー・オブ・アメリカ版の刊行まではひとつの例を除いていかなる書籍にも再録されていない。

その例とは、1975年にリチャード・ゴールドストーン (Richard H. Goldstone) が出版した評伝『ソーントン・ワイルダー 親密な肖像』(*Thornton Wilder: An Intimate Portrait*)に、本論文で取り上げる「ザベットの結婚」(“The Marriage of Zabetta”)が掲載されているものであり、補遺のような形式で巻末に付けられているのではなく、評伝の本文中でその全文が掲載されている。しかし、ワイルダーはゴールドストーンに宛てた1968年11月19日付の書簡で、“I can’t help feeling that you so far misunderstand me that you think I’m flattered when you run up palliatory [sic] extenuating phrases about The Trumpet Shall Sound or The Marriage of Zabetta (I can’t remember a word of it—not even ‘the yellow lakes’). I suspect that every self-respecting author loathes hearing his juvenilia mentioned. Stop it.” (Wilder and Bryer 662–63) と書いている。“the yellow lakes”とは「ザベットの結婚」の最初の文で使われているフレーズであり、評伝においてゴールドストーンは、“From the very first sentence, we derive the sense of security provided by the work of a genuine writer.” (Goldstone 25) と書いて、ワイルダーのこの短編小説を称賛しているのであるが、ワイルダーは、ゴールドストーンが評伝で行おうとしていた彼の若かりし頃の作品を紹介するということに対して激しい怒りをあらわにしている。「ザベットの結婚」がその評伝に最終的に収載されることになった経緯はわからないが、ワイルダーが喜んでそれを認めたわけではないことは書簡から容易に推察できる。

このように、作家ならば多かれ少なかれそうではあろうが、ワイルダーは自分自身が納得できていない作品が書籍という形で出版されることが、たとえそれが他人から好意的な評価を受けているとしても、非常に嫌だったわけである(ちなみに、上記の書簡に出てきているワイルダーの初の多幕劇『トランペットを吹き鳴らせ』[*The Trumpet Shall Sound*]も、1919年から1920年にかけて雑誌に掲載された以後は出版されていない)。しかし、ラ

イブラリー・オブ・アメリカ版の三冊すべての編者を務めている詩人・評論家で、『イェール・レビュー』(Yale Review)の編者でもあるイェール大学教授のJ. D. マクラチー(J. D. McClatchy)は、ワイルダーの多幕劇では初めて活字となった『トランペットを吹き鳴らせ』は掲載しなかったが、「ザベットの結婚」を含めた六篇の短編小説は掲載した。ワイルダーの甥で未刊書の管理者であるA. タパン・ワイルダー(A. Tappan Wilder)の意向が掲載作品の取捨選択に影響しているということはあるかもしれないが、マクラチーがワイルダーの作家としての萌芽期に書かれた初めての多幕劇は掲載せずに、短編小説は多数、しかも、彼の短編小説としては初めて雑誌に掲載された1916年発表の二篇は選ばずに遺稿のなかから一篇を掲載した理由は、彼がそれらの作品のなかにワイルダーののちの戯曲や小説につながる秀でた要素を見つけたからなのかもしれない。

さらに、六編のうち、本論で取り上げる「ザベットの結婚」に関しては、1983年に出版されたギルバート・ハリスン(Gilbert A. Harrison)による評伝において、“The *Oberlin Literary Magazine* printed it, which encouraged the author to send it to the *Little Review*, which rejected it. ‘When shall I begin to be acceptable?’ he groaned.”(Harrison 41)と、そして、2012年に出版されたピネロピ・ニヴン(Penelope Niven)による最新の評伝においても、“[A]nd a florid, melodramatic short story, ‘The Marriage of Zabett,’ which he was trying unsuccessfully to sell to a literary journal. It ultimately appeared in the *Oberlin Literary Magazine* in June 1917.”(Niven 126)と、この短編小説を文芸専門雑誌に投稿したというエピソードが紹介されている。ワイルダーののちには自分が気に入らない初期の作品を掘り起こそうとするゴールドストーンに対して腹を立てたわけであるが、このエピソードから、ワイルダーが執筆当時はこの短編の出来栄にそれなりの自信をもっていたことが推測できる。

本論では、ライブラリー・オブ・アメリカ版に掲載された六編の短編小説のなかで最も早くに出版され、ワイルダーも出来栄に自信をもっていたと思われる「ザベットの結婚」について、まず、この作品に対する批評と作品の特長を考察する。続いて、この小説で使用されているモチーフが、ワイルダーの戯曲で繰り返し用いられているだけでなく、彼が『わが町』において観客に衝撃的な演劇の経験を与えることに成功する場面においても使用されていることを考察することを通して、この短編小説がのちのワイルダーの作品につながる重要な萌芽となっていることを明らかにする。

2. 作品への批評と作品の特長

「ザベットの結婚」は、のちに「聖ザベット」(St. Zabetta) となる裕福な商人の娘ザベットが、父親の仕事のパートナーとの結婚ではなく、神との結婚を選択する過程を描いた作品である。ザベットは、教会で聖人たちの受難に思いを巡らせることを好むいっぽうで、男性と楽しくおしゃべりをするのも好きな美しい女性であるのだが、男性に身体に触れられるたびに身体が震えて具合が悪くなっていた。結婚の話が来て幸せな気持ちでいたのだが、求婚された瞬間に身体の震えを感じてしまい、さらに、腕に抱かれてキスをされたときに、火あぶりにされたような激しい痛みを体験する。教会に駆け込んだザベットは、そのように身体に異変が起こるのは自分が神に仕えることになる身なので神に守られているからなのだとということによりやく気づく。それと同時に、結婚を遅らせてもう少し待つようにという神託を受ける。そして、いよいよ結婚しなければいけないという前日の夜によりやくふたたび神託が下り、彼女はすべてを捨てて神のもとへ向かう、というのが話の筋である。

まず、これまでの批評についてである。この短編小説はワイルダーがオーバーリン・カレッジ (Oberlin College) 在学中の1917年6月に発行された『オーバーリン・リテラリー・マガジン』(Oberlin Literary Magazine) に掲載されたのであるが、これまでのワイルダー研究の批評書ではこの小説についてはまったく触れられていない。これは、ライブラリー・オブ・アメリカ版のほかの五篇の短編についてもほぼ同様である (レックス・バーバンク [Rex Burbank] が『ソーントン・ワイルダー』[Thornton Wilder] のなかで、「ある日誌：最初で最後の記帳」[“A Diary: First and Last Entry”] について触れているが、作品の筋の紹介も批評もなく、書誌情報を載せているだけである [Burbank, 20] し、ドナルド・ヘイバーマン [Donald Haberman] の『ソーントン・ワイルダーの戯曲：批評研究』[The Plays of Thornton Wilder: A Critical Study] のなかで、「軍艦」が扱われているが、ワイルダーのある一幕劇について論を展開するためにその一文が引用されているだけで、この短編小説についての筋の紹介もなければ、直接的な批評もない [Haberman 104])。そして、最新の論文集である『ソーントン・ワイルダー 新しい視点』(Thornton Wilder: New Perspectives) では、ライブラリー・オブ・アメリカ版の編者であるマクラチャーも寄稿して、小説家としてのワイルダーについて論じているが、中・長編小説について触れているだけで、残念ながら短編小説に関するコメントはなされていない。特にアメリカの研究

者ならば掲載雑誌を入手・閲覧することは困難ではないと思われることから、この作品、ひいては、短編小説群全般については、初期の習作に過ぎず、重要なものではないという判断がなされてきたことになる。

いっぽう、六篇の短編小説のなかでは「ザベットの結婚」だけが、前節で触れた三冊の評伝にリンダ・サイモン (Linda Simon) による『ソートン・ワイルダー 彼の世界』(Thornton Wilder: His World) を加えた、これまでに出版されている四冊の評伝すべてにおいて紹介されている。1975年のゴールドストーンの評伝では、この短編のスタイルが最初の三篇の中・長編小説に似ており、このような主人公がのちのワイルダーの小説に繰り返し登場することが指摘されており (Goldstone 25), 1979年のサイモンのそれにおいても初期の小説との類似が述べられるとともに、婚約者からの愛情を嫌悪するという主人公の感情がワイルダーの作品ではめずらしいものであることが述べられている (Simon 26-27)。1983年のハリスンの評伝では、ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare) の『冬物語』(The Winter's Tale) をベースにしていると短く書かれているだけであるが、2012年のニヴンのそれでは、ワイルダーの未発表の書簡が引用され、彼がこの作品で新しい文体をつくりだそうとしていたことが指摘されている (Niven 126-27)。後でも引用するようなきちんとした指摘はあるのだが、批評というよりは長い評伝のなかでの短いコメントというレベルにとどまらざるを得ないところが、この作品に対するこれまでの評価を表しているといえる。

次に、この短編小説の特長について述べる。この作品は、わずか八つの段落で構成されているとても短い小説であるが、大きな特長はその文体である。ほかの五篇の短編と比較しても、倒置などの文法を用いて文の構造を複雑に見せている文が多く見受けられる。そのなかからいくつかのパターンを文例とともに挙げる。そのひとつ目は他動詞の目的語を文頭に出している文であり、“This she could not explain, and it made her afraid.” (“The Marriage of Zabet” 607), “[B]ut his caresses she could not put off, . . .” (Zabet 609), “[M]e and many another she spared from that exile of a woman’s soul from Heaven, the marriage of the body.” (Zabet 609) などの例がある。ふたつ目は他動詞とその目的語のあいだに副詞句を割り込ませている文であり、“[A]nd holding in his hand astronomical instruments, hung in her father’s counting-house.” (Zabet 607), “[F]or the love of God, she mentioned in her prayers to them a new name, . . .” (Zabet 608), “She went in, and flinging herself upon the pavement, rehearsed before a great and mystical company the history of her stony heart; . . .” (Zabet 608) など

の例がある。三つ目は副詞節を他動詞の目的語としての名詞節に割り込ませている文であり、“[S]he remembered how when a man tried to catch hold of her hands, the touch set her a-trembling, and thereafter she lay [sic] shuddering the whole night through.” (Zabett 607) と、“[S]he forgot, foolish girl, how when some man stole a kiss from her in the dance, she turned pale and sickened and shuddered.” (Zabett 608) の例がある。そして、四つ目は副詞句が文頭に出ることで倒置が起こる文であり、“[A]nd in her mind were the delicate hands and black beard of Ketterlingen, her betrothed.” (Zabett 608), “But she could not answer him, no, for about her neck rested the pearls of two colors; on her shoulders floated his scarf . . .” (Zabett 608), “Then was the whole porch illuminated with a pulsing light, . . .” (Zabett 608) の例がある。

さらに、小説の終盤では、“Ah, Zabett, distracted wert you on the eve of thy wedding; thou lookedst for signs on earth and in the sky and in the flights of birds. . . Nay, saintly lady, but in thy last and frantic hour, as thou satst yearning at the window, there white and delicate feathers floated against thy face and cooled thy eyelids and thy wan brow.” (Zabett 609) と、シェイクスピア劇の台詞を思わせる古英語を用いた詩のような文が、ザベットに神託が下りてくる場面まで続く。

このように、文の構造を複雑に見せる文と、古い時代の英語を使った文を多用している理由は、ゴールドストーンが、“The story’s slightly archaic tone, so appropriate to the subject and the setting, with its echoes of the Jacobean Bible, emerges without strain, with no sense of labored mannerism.” (Goldstone 25) と指摘しているように、“In the days when Martinus Scheihoffen was pursuing the Devil with forty armed men about the yellow lakes, there lived in the village of Kaage a woman named Zabett der Derken.” (“The Marriage of Zabett” 607) と始まるこの小説のような、すなわち、出だして悪魔に関する記述が出てくるような、神話・伝説を題材にした作品の主題や内容を読者にうまく伝えるためには、古めかしさを醸し出すことができる文語調の文体がぴったりと当てはまるとワイルダーが考えたからであろうと推察できる。

また、一般的には読みづらはずの文語調の文が比較的読みやすい文章になっているのは、ニヴンが、“plain narrative, with economy of ornament and absolutely with [out] comment; as innocent of labored footnotes as the book of Acts.” (Niven 127) と、ワイルダーが新しい文体を試していたことを彼の未発表の書簡から引用して示してい

るように、修飾や説明が過多になった凝り過ぎた文になっていないからであるといえる。

以上のように、この小説においては、神話・伝説を題材とした作品を文語調の文体で物語り、その主題や内容を読者にうまく伝えることに成功しているといえる。しかし、ワイルダーは、異国を舞台とした最初の三篇の中編小説、そして、「ザベットの結婚」と同様に聖書・神話・伝説・芸術家の伝記などが題材であり、この短編小説と同時期に雑誌に発表された一幕劇が多数収載されている彼の初の劇集『池を波立たせた天使』を出版したあとは、現代のアメリカを舞台とする作品へと舵を切っていく。

ワイルダーを現代のアメリカを舞台とする作品へと向かわせたその理由とは、筆者が以前に指摘しているように、過去の異国が舞台であったり、聖書・神話・伝説を題材とした小説や劇のなかでのほうが、自分の主題や思想を読者や観客に具体性をもって伝えることができると思ったのであろうが、実際に創作するなかで、自分が想像していたほどうまくはできないということをし、そして、より具体性をもって自分の主題や思想を伝えるには、具体的なアメリカ人やアメリカの町が必要であることをワイルダー自身がおそらく感じたであろうからなのである（井上 博士論文 71）。

3. 繰り返されるモチーフ「聖人」

しかし、写実主義演劇のいわゆる「第四の壁」を壊す劇を書きたいワイルダーにとって、具体的なアメリカ人やアメリカの町を具体的に提示することでは自分の主題や思想を表現することはできないという矛盾に陥る。その矛盾を、ワイルダーは1938年初演の多幕劇『わが町』で「舞台監督」(Stage Manager)を登場させることによって見事に解決するのであるが（井上 博士論文 71）、その『わが町』で作者の主題と思想を表現する重要な場面において「舞台監督」の台詞に登場するのが「聖人」(saint)なのである。そして、この「聖人」というキーワードは、その21年前のワイルダーの萌芽期の短編小説であるこの「ザベットの結婚」ですでにモチーフとして用いられているのである。

「聖人」がキーワードとして「舞台監督」の台詞に登場するのは、『わが町』の最終幕である第三幕の終幕直前である。死者となったエミリー (Emily) は、「舞台監督」の計らいでもう一度生者の世界に戻ることを許される。ところが、生者たちが現実の時間のなかで、生きていることの素晴らしさ・生きているからこそ体験できる素晴らしさを認識できずに過ごしていることに耐えられず、すぐにエミリーは死者の世界に戻る決意をする。その際にエミリーは「舞台監督」に向かって、“Do any human beings ever realize life while

they live it — every, every minute?” (*Our Town* 100) と尋ねる。言い換えると、生者の世界の現実の時間のなかで現実の時間を越えたもの、すなわち、「永遠なるもの」を認識できた人は今までにいるのかと尋ねるわけであるが、その問いに対する、“No. [Pause.] The *saints* and poets, maybe — they do some.” (*Our Town* 100, italics mine) という「舞台監督」の返答のなかに、「詩人」とともに示されるのが「聖人」なのである。

つまり、生者が人生の瞬間瞬間を無駄に過ごして現実の時間のなかで生の素晴らしさを認識することができないということに、エミリーは死者となってようやく気づくのであるが、「聖人」というのは生きているときにそれに気づいている存在なのである。『わが町』の教会のオルガン奏者で酔っ払いのサイモン・スティムソン (Simon Stimson) は、「聖人」と同様に生きているときにそれに(おそらく)気づいてしまった人物として登場するが、彼は酔っばらうことでは耐えきれずに自殺をしてしまう。現実の時間のなかで生者に囲まれながら生の素晴らしさを認識して生きていくことは、言い換えると、「時計の時間に付随するもの(邪悪なるもの)」と「時計の時間を越えた永遠なるもの(善なるもの)」の両方を感じ取りながら生きていかなければならないということであり、そのように生きていくことは結果的に自殺を選んでしまうほどつらく苦しいことなのであるが、それを生涯実践していくのが「聖人」なのである。

「舞台監督」の返答に「聖人」が出てくるエミリーとのやり取りの直前に、“Good-by, good-by, world. Good-by, Grover’s Corners . . . Mama and Papa. Good-by to clocks ticking . . . and Mama’s sunflowers. And food and coffee. And new-ironed dresses and hot baths . . . and sleeping and waking up. Oh, earth, you’re too wonderful for anybody to realize you.” (*Our Town* 100, ellipsis by Wilder) と、エミリーは「この世」から始めて「眠ることと起きること」まで、さまざまな現実の場所・人間・事物・行為を列挙して別れを告げる。この台詞は、自分が見慣れて体験し慣れていたはずのさまざまな現実の対象のなかに本来的な素晴らしさがあることを、すなわち、現実の時間に付随するもののなかに「永遠なるもの」が存在していることを、エミリーが認識していることを示している。そして、この瞬間に、(架空の町ではあるが) 具体的なアメリカの町で、観客は具体的なアメリカ人であるエミリーとともに、「舞台監督」の導きのもとで、現実の時間のなかで現実を超えた時間である「永遠」があることを認識するという衝撃的な演劇的経験をするのである(井上 博士論文 142)。しかし、そのような衝撃的な経験を観客に与えるいっぽうで、ワイルダーはそのあとすぐに「聖人」に関するやり取りを続けることで、現実の時間のなかで生者に囲まれながら「永遠なるもの」を認識していくことはと

てもむずかしいことであることも、観客にしっかりと伝えているのである。以上のように、『わが町』では、「聖人」というキータームが、作者が主題と思想を表現する重要な場面において用いられ、効果的な役割を果たしているのである。

さて、ここで話を『わが町』の21年前の短編小説である「ザベットの結婚」に戻し、「聖人」というモチーフがどのように用いられているかをみってみる。

この小説の出だしから三文目で、“On the feast days, Zabetta loved to go to church and muse with closed eyes on the sufferings of the *saints*.” (“The Marriage of Zabetta” 607, italics mine) と、キーターム「聖人」が出てくる。しかし、それ以降はこの語は使われないため、読み進めていくうちにその語が出てきたことはおそらく忘れられてしまうであろう。ところが、この小説は以下の文で締めくくられて終わるのである。

This was the *St. Zabetta* of Kaage who founded the great convent wherein I write these words; me and many another she spared from that exile of a woman's soul from Heaven, the marriage of the body. She is our intervention; without her we should be dead, slain by the caresses of our husbands. (Zabetta 609, italics mine)

読者はこの直前まではこの小説を全知全能の語り手によるものとして読み進めているのだが、最後の最後で「私」という一人称の語り手が登場する。そして、この語り手は、ザベットが「聖ザベット」であり、その「聖人」が設立した修道院で自分がこの文章を書いていることを明らかにする。前節ではあえて触れなかったが、作品の最後にザベットが「聖人」であるという種明かしがされるというように、作品全体の語りの構造に仕掛けがなされていることが、この短編小説のもうひとつの特長なのである。

ここからは、まず、このキーターム「聖人」が、ワイルダーの萌芽期の作品において繰り返し現れているモチーフであることを確認してみたい。

実のところ、「ザベットの結婚」以前に、「聖人」というモチーフはすでに三つの作品において使われている。まず、「ザベットの結婚」のちょうど一年半前の1915年12月に発行の『オーバーリン・リテラリー・マガジン』に掲載された一幕劇のタイトルに現れる。この作品「聖フランシスコの湖」(“St. Francis Lake”)は、一幕劇集『池を波立たせた天使』にはその後収載されず、書籍としては未刊行のままであるが、サイモンの評伝によると、そのタイトルは、店を営む姉妹が年に一度休暇で訪れる隣村の名前を指している (Simon

24-25)。ここで重要なことは、ゴールドストーンが、“Just below the surface of ‘The Marriage of Zabett’ is the idea of devoting one’s life to the service of those in need of help. The lives of Saint Clara and Saint Francis had impinged on Thornton’s sensibilities; . . .” (Goldstone 26) と、ワイルダーが「ザベットの結婚」の執筆以前にすでに「アッシジの聖フランシスコ」に強い影響を受けていたことを紹介していることから、このタイトルの「聖フランシスコ」はおそらくフランシスコ会の創設者である「アッシジの聖フランシスコ」のことを指していることであり、この一幕劇のおよそ半年後の1916年5月に同じ雑誌に、のちの「アッシジの聖フランシスコ」であろうと思われる「フランシスコ修道士」(Brother Francis)を描いた一幕劇「ブラザー・ファイア」(“Brother Fire”)を發表していることである。さらに、「ブラザー・ファイア」の半年後の1916年11月に同じ雑誌に發表された、残念ながらライブラリー・オブ・アメリカ版に収載されず、書籍としては未刊行のままである短編小説「ドマ・イ・ヴェヌジアスの二つの奇蹟」(“Two Miracles of Doma y Venuzias”)においても、サイモンが、“‘Two Miracles of Doma y Venuzias,’ . . . relates two tales about Doma, the saint of a small Spanish village.” (Simon 26) と紹介しているように、「聖人」をモチーフとして取り上げた作品が發表されている。そして、そのおよそ半年後の1917年6月に掲載された「ザベットの結婚」へとそのモチーフの使用が繋がっていくのである。

ワイルダーは厳しいピューリタニズムの家庭で育ったので、二歳上の兄のエイモス・ワイルダー (Amos Wilder) がのちに神学者となったように、彼が宗教的なものへの強い関心を抱き、「聖人」に強い興味を示したとしてもそれは驚くことではない。しかし、重要なことは、ワイルダーが作家としての萌芽期からすでに、自分の主題・思想を表現しようとするなかで「聖人」をモチーフとして取り入れていたということなのである。

そして、「ザベットの結婚」から21年の歳月を経てふたたび、『わが町』の第三幕で「聖人」が登場するのである。ところが、さらに驚くべきことに、ワイルダーが作家としての後期に構想した、それぞれが七本的一幕劇で構成される二つのサイクル劇「人間の七つの世代」(*The Seven Ages of Man*)と「人間の七つの大罪」(*The Seven Deadly Sins*)を円形劇場で上演するというプロジェクトの、「人間の七つの大罪」を構成する作品で「聖人」がモチーフとしてふたたび使用されている。しかも、その一幕劇とは、1916年の「ブラザー・ファイア」の46年後にふたたび「アッシジの聖フランシスコ」を登場させた「アッシジの人」(“Someone from Assisi” 初演1962, 出版1997)なのである。

このように、ワイルダーは作家としての萌芽期から晩年まで常に「聖人」に強い関心が

あり、自分の主題・思想を表現する際に「聖人」をモチーフとして用いることを常に考えていたことがわかる。それではこの節の最後に、「アッシジの聖フランシスコ」が登場する二作品である「ブラザー・ファイア」と「アッシジの人」を取り上げ、それぞれの作品において、「聖人」というモチーフがどのように用いられているかをまとめ直してみたい。

「ブラザー・ファイア」では、フランシスコ修道士が修行の帰りにとある母娘の家を訪れる。“Brother Wind” (“Brother Fire” 44), “Sister Rain” (“Brother Fire” 44), “Brother Fire” (“Brother Fire” 44) という表現を使っているところから、この修道士は、「太陽の歌」(*Cantico delle creature*)において太陽・月と星・風・水・火・大地・肉体の死を「兄弟姉妹」として神を賛美した、フランシスコ会の創設者である「アッシジの聖フランシスコ」の前身だと推測できる。娘は母親から、“Not so near. One of these days you’ll be falling into the fire and there’ll be nothing left to tell us about you but your shoes.” (“Brother Fire” 43), “Don’t you hear me tell you it’s a wicked thing?” (“Brother Fire” 43) と、「火は邪悪なものだ」と教えられている。この母親は、火を邪悪なものとししか認識できず、火の素晴らしさを認識できない人物、すなわち、『わが町』でエミリーが嘆く、現実の時間のなかで生の素晴らしさを認識することができない生者と同じ種類の人物として描かれている。フランシスコ修道士は娘に対して、“Why, what would cook your broth, what would keep you warm? And when you return from the mountain-tops, what else shines out from all the friendly windows of the world?” (“Brother Fire” 45) と、火の善なる部分を述べ、さらに自らが炎に包まれることで「火が邪悪なものだけのものではない」ことを娘に理解させようとする。

ワイルダーは、自ら炎に包まれるフランシスコ修道士を描くことで、「聖人」として生きるということは、善なるものも邪悪なるものも含めたありとあらゆるものを受け入れ、さらには、生の素晴らしさ・火の素晴らしさを認識できない人間からすると滑稽に見える、「自ら炎に包まれる」というような行動を時には取りながら生きていかなければならないということを示そうとしている(井上『池を波立たせた天使』論 129)。

その46年後の「アッシジの人」に登場するフランシスコ神父(Father Francis)も、『アッシジの聖フランシスコ』に付けられた年表に「1225 [年] サン・ダミアノのクララを訪問、《太陽の歌》の冒頭を作る。眼病が悪化してほとんど見えなくなり……」(374)とあり、劇中に、“I am Mother Clara of the Poor Sisters at Saint Damian’s.” (“Someone from Assisi” 195), “(Confidentially) Maybe I’m a little bit blind, but . . . I hear so well. I hear so much better.” (“Someone from Assisi” 198, ellipsis and italics by

Wilder) と出てくることから、「アッシジの聖フランシスコ」である。劇中では、修道院を訪れた彼といっしょに食事をとりたいと修道女たちが食事の席で待っている。しかし、「貧困」と結婚した彼は食べたいという人間の「欲」をもうすでに捨て去っており、“(He turns to Clara and adds with eager face) Let us go to the church now and fall on our knees. Let us ask forgiveness.” (“Someone from Assisi” 200), “(Rising, stuttering with eagerness.) Sister C-C-Clara, let us go into the chapel and thank God.” (“Someone from Assisi” 200) と、ただ神に祈りを捧げたい。そして、劇の最後には、自分が「欲」に支配されていたときの恋人で、今は狂人となってしまっているモナ (Mona) を家へ送り届けるために修道院から去ってしまい、修道女たちは彼と食事をするができなくなってしまう。

ワイルダーは、この一幕劇においても、「ブラザー・ファイア」で自ら炎に包まれるというフランシスコ修道士の極端な態度と同様に、ひたすら神に祈りを捧げたいために食事を取ることをさえためらうというフランシスコ神父の極端な態度を描くことで、「聖人」として生きるということは、生の素晴らしさを認識できていない人間からすると滑稽に見える行動を時には取りながら生きていかなければならないということを示そうとしている(井上「ブリーカー・ストリートのための劇」論 24)。

「聖人」の生き方が「聖人」ではない人間からは滑稽に見えるということは、裏を返すと、上でみた『わが町』でのエミリーの問いかけに対する「舞台監督」の返答が示していることと同様に、現実の時間のなかで生者に囲まれながら「時計の時間に付随するもの(邪悪なるもの)」と「時計の時間を越えた永遠なるもの(善なるもの)」の両方を感じ取りながら生きていくということは、とてもむずかしいということなのである。ワイルダーは、この二つの一幕劇で「聖人」というモチーフを用いて、観客にそのことを伝えようとしているのである。

4. お わ り に

以上のように、本論では、ワイルダーの萌芽期の短編小説「ザベットの結婚」に対するこれまでの批評と作品の特長を考察したのちに、この小説で用いられているモチーフ「聖人」が、萌芽期のほかの短編小説や一幕劇でも用いられているだけでなく、彼の代表的な多幕劇『わが町』において観客に衝撃的な演劇的経験を与えることに成功する場面において効果的に用いられ、さらに、その24年後的一幕劇においても、彼が自分の思想と主題を

伝えようとする際のモチーフとして変わらず使用されていることを確認した。

このことから、「ザベットの結婚」は、ほかの萌芽期の作品とともに、「聖人」をモチーフとして使用する作品の原点であるという理由で、のちのワイルダーの作品につながる重要な作品であることは明らかであり、現在のところは残念ながら研究者からの批評の対象にはなっていないが、ライブラリー・オブ・アメリカ版を通じてこの短編小説が広く読まれ、そして、深く論じられることが望まれるのである。

引 証 文 献

- [1] Bryer, Jackson R., and Lincoln Konkle, eds. *Thornton Wilder: New Perspectives*. Evanston, Illinois: Northwestern UP, 2013.
- [2] Burbank, Rex. *Thornton Wilder*. 2nd ed. Boston: Twayne, 1978.
- [3] Gallup, Donald, and A. Tappan Wilder, eds. *The Collected Short Plays of Thornton Wilder*. Vol. I. New York: Theatre Communications Group, 1997.
- [4] Goldstone, Richard H. *Thornton Wilder: An Intimate Portrait*. New York: E. P. Dutton, 1975.
- [5] Haberman, Donald. *The Plays of Thornton Wilder: A Critical Study*. Middletown, Connecticut: Wesleyan UP, 1967.
- [6] Hamalian, Leo, and Edmond L. Volpe, eds. *Pulitzer Prize Reader*. New York: Popular Library, 1961.
- [7] Harrison, Gilbert A. *The Enthusiast: A Life of Thornton Wilder*. New Haven: Ticknor & Fields, 1983.
- [8] McClatchy, J. D., ed. *Thornton Wilder: The Bridge of San Luis Rey and Other Novels 1926-1948*. New York: The Library of America, 2009.
- [9] McClatchy, J. D. "Part of the Alphabet: Wilder as Novelist." Bryer and Konkle 13-21.
- [10] Niven, Penelope. *Thornton Wilder: A Life*. New York: HarperCollins, 2012.
- [11] Simon, Linda. *Thornton Wilder: His World*. New York: Doubleday, 1979.
- [12] Wilder, Robin G., and Jackson R. Bryer, eds. *The Selected Letters of Thornton Wilder*. New York: Harper Perennial, 2009.
- [13] Wilder, Thornton. *The Angel That Troubled the Waters and Other Plays*. New York: Coward-McCann, 1928.
- [14] —. "Brother Fire." *The Angel That Troubled the Waters and Other Plays*. 43-48.
- [15] —. "The Marriage of Zabett." McClatchy 607-09, and Goldstone 23-25.
- [16] —. *Our Town. Three Plays*. 1-103.
- [17] —. "Someone from Assisi." Gallup and Wilder 193-209.
- [18] —. *Three Plays: Our Town, The Skin of Our Teeth, The Matchmaker*. New York: Harper & Row, 1957.
- [19] —. "The Warship." McClatchy 638-41, and, Hamalian and Volpe 106-09.
- [20] ヨルゲンセン, J. J. 『アシジの聖フランシスコ』永野藤夫訳. 東京: 平凡社, 1997.
- [21] 井上治. 「ソーントン・ワイルダーの作品の多層的主題とその表現構造」博士論文. 関西大学, 2003.

- [22] —, 「ソートン・ワイルダーの『池を波立たせた天使』論—劇作家としての出発点」『近畿大学英語研究会紀要』第3号(近畿大学英語研究会, 2009): 125-42.
- [23] —, 「ソートン・ワイルダーの『ブリーカー・ストリートのための劇』論—円形劇場でワイルダーが目指したこと」『生駒経済論叢』第11巻第2号(近畿大学経済学会, 2013): 13-27.